

02・真昼の逃避行

とある年の秋。『01・目を覚ましたら、ひざまくら』の翌日。

九月下旬の土曜日、十五時半ごろ。

日本のとある、かなり寒い地域の政令指定都市。

天気は晴れ。気温は二十四度程度。

快適に過ごせる秋の休日。

場所は、主人公の住む市の中心街にある、有名チーン系カフェ。主人公は今、妹の『雪城 花音（かのん）』とお茶をしている。

二人は先ほど店に入つて注文し、席についたばかり。

コーヒーには、まだほとんど手を付けていない。

会話に夢中になつていて、飲食が進んでいないのだ。

SE1 カフェの環境音

【最初から最後まで流す】
【繰り返して流す】

〔0—5秒ほどまで流してセリフ〕

〔その後、音量を非常に小さくして流し続ける〕

〔▲2でストップする〕

〈花音〉

「思いつきり呆れて。

『そんな事』とは『昨夜、主人公がお酒に酔つて、マンションのロビーラウンジで寝てしまった事』を指す

うわあ。お姉ちゃん、そんな事してよく無事だったねえ」

しかし、花音はこの通り、非常に呆れています。

それはもちろん、主人公が、昨日のイヴとの出来事を話したからである。

〈主人公〉

「……ぐうの音も出ません……」

主人公『とほほ……』と肩を落としつつ、花音のもつともな指摘を受け入れる。

主人公と花音は、六歳年が離れた姉妹だ。

つまり、花音はまだ大学生なのだが、社会人の主人公よりも、よっぽどしつかりしてい
る気がする……。

〈花音〉

「主人公と花音は、こうして二人で買い物に来るほど仲がよい。

なので遠慮せず、すけずけと指摘する】

いくらマンションの中とは言え、その広末（ひろすえ）さんつて子が来なかつたらどう
なつてた事か。

【考え込むが、あまり間を置かず、すぐに続ける。

『たとえば、こんなひどい目に遭つていたかもしれないよ』という、悪い例は、いくら
でも思いつく。

しかし、あまりそういった、起きもしなかつた不穏な想像を話して主人公を脅すのは、
どうかと思う。

また、想像でも、あまりそういう事は口にしたくない。

なのでやめ、マイルドな例にとどめる。花音は頭の回転が速い】

少なくとも、風邪引いてたよねえ。

【主人公に言い聞かせる。『親切で優しい』をやや大げさに強調して。

主人公とイヴの住む『ガーデン瀬瀬』は主人公たちのおじの持ち物で、主人公は彼の厚

意により、格安で住まわせてもらっている。

なので、これを忘れてはならない。と言いたい

お姉ちゃんはね？ 親切で優しいおじさんの厚意で、あんないいマンションに安く住まわせてもらつてるんだから。

住人の自覚を持たなきやダメだよ。

『THE・しつかり者の妹からの姉へのアドバイス』という感じで。

当然自覚を持つだけでは足りないので、今度はイヴの件に触れる

広末さんにも、ちゃんとお礼してね。教師と生徒って言うか、人と人としてさあ

〈主人公〉

「はい。わかつております……」

主人公、ガクリとうなだれつつ、素直に頷く。

花音に言われずともそうするつもりだつたが、今の自分がそう主張しても、なんとも頼りない。

黙つてお説教されるほかなかつた。

〈花音〉

「『主人公が素直に反省しているので、そろそろこの話題を切り上げてあげよう』と思つている」

わかつたならよろしい。

【さらつと話題を変える】

で、何だつけ。柔軟剤買うんだつけ。向かいの店にしか置いてない奴

〈主人公〉

「あ、そうそう。広末さんに、お礼としてプレゼントしようと思つて……」

〈花音〉

「『なぜ急に柔軟剤など欲しがるのだろうか』と不思議に思つていたが、これで納得するお礼つて事か。

【ちょっと偉そうに。】

主人公がきちんとイヴへの礼を果たしそうなので、安心している

いい心がけだね。

【にやにやと】

言葉だけじや足りないもんねえ。

【しかし、ほとんど接点のない生徒だつたにもかかわらず、主人公の服の柔軟剤に反応し

てくれたのはラッキーだった。でなければ、お礼をしたいけど、何を渡せばいいのかわからぬ。という状況になりかねなかつた……』と思つてゐる』

『『だつたら私その後、本屋さん行きたい』と言いかける』
だつたら私その後……』

SE2 電話のバイブルーション

【最初から最後まで流す】

【繰り返して流す】

【1回分（6回の振動）ほど鳴つてからセリフ】

【▲1でストップする】

〈花音〉

「少し間をあけてから。

スマホの表示を見て、アルバイト先からだと気づく

バイト先だ。ごめん。出てもいい？』

〈主人公〉

「どうぞどうぞ」

〈花音〉

「やや早口で言い、そのまま電話に出る
ありがと」

▲1 ここでSE2が止まる。

〈花音〉

「ここから電話の相手との会話。

『デキる学生アルバイト』という感じで、主人公と話している時よりも、低めで、さら
にしつかりした印象の声音になる。

ところでなぜ『雪城です』ではなく『花音です』と返事をするのかというと、珍しい事
に、花音のバイト先にはもう一人『雪城さん』がいるからである

はい、花音（かのん）でーす。お疲れ様でーす。

『今日、アルバイトは十八時からですよね？』と確認したい

どうしました？ 今日つてバイト六時からですよね？』

〈電話の相手〉※ボイスなし※

「それが、今日、急に○○さんが休むことになっちゃって。
できれば花音ちゃんに早めに来てもらえると助かるんだけど……」

〈花音〉

「少しも動じず『その位なら全く構わない』という感じで】

あ、マジですか。わかりました。

【店に到着し、働き始めるのは、早ければ早い方がいいですよね?】
早い方がいいですよね?】

〈電話の相手〉※ボイスなし※

「うん! 本っ当に申し訳ないんだけど、できるだけ早く来てもらえると助かる!】

〈花音〉

「わかりました。今近くなんで、四時には行けるようになります】

〈電話の相手〉※ボイスなし※

「ありがとうございます。じゃあ、待ってるね!】

〈花音〉

「明るく。

内心驚いているが、『急なスケジュール変更で、迷惑がつていてる』と思われないようにしている】

はい。失礼しまーす」

花音、ここで電話を切る。

主人公、花音の声しか聞こえなかつたものの、内容はおおむね察する。

〈主人公〉

「早く来てほしいって？」

〈花音〉

「少し申し訳なさそうに。

『主人公と、後二時間程度は一緒に買い物をする』という予定が急に変更になり、主人公に申し訳なく思つて いる。それに、花音としても残念】

そう。急に休んだ子がいて、なるべく早く来てほしいんだつて。

「ごめんね。だからもう行くわ」

〈主人公〉

「あら、残念だね。じゃあ、花音のお店まで近いし、私もそこまで一緒に……」

〈花音〉

「【食い気味に。それは申し訳ない。】

【せめて主人公には、注文したばかりのコーヒーを飲んでほしい。】

【あと、単純に食べ物を残すのはもったいない。花音はケチである】
いいよいよ。

【まだコーヒー残ってるじやん。お姉ちゃんはゆつくりしてきなよ】

S E 3 花音が席から立ち上がる音

【最初から最後まで流す】

S E 4 花音が席に置いていた鞄を持ち上げる音

【最初から最後まで流す】

〈花音〉

「そいじやいくね。柔軟剤忘れんなよ！」

〈主人公〉

「おう！ バイト頑張つて！」

〈花音〉

「またねー！」

S E 5 花音の足音

【最初から最後まで流す】

花音、足早に去つていく。

主人公は、一人残された形になる。

主人公、この突然の展開に『もうちょっと花音と一緒に遊びたかったなあ。まあ、仕方ないか』『じやあ、コーヒーを飲み終わつたら、向かいのお店で柔軟剤を買って、帰ろうかなあ』と残念に思いつつ、この後の身の振り方について考える。

それから、とりあえず的にコーヒーに口を付け、ぼーっとする。

十秒ほど環境音のみが続く。

こうして、主人公がのんびりし始めた頃……。

突如向こうから『今、主人公がお礼をしたい人・ナンバーワン』が歩いてきた！

主人公、衝撃の展開に、思わず背中を『ビヨン！』と跳ねさせる。

えっ！ 広末さん、どうしてこんな所に！

と、とりあえず様子を見よう。

もし誰かと来てるんだったら、ムダに声をかけて邪魔する事もないし。

『学校の先生』つてものが、休日偶然会う相手としては、微妙な存在である事は重々承知しておりますので……。

主人公、まずはイヴの様子を、遠目にちらちらと確認する。

そうするうち、彼女が、席あるいは人を探しているらしい事に気づく。

先ほどからイヴは、カップを手に持ったまま、店全体を見渡すようにきょろきょろした

り、時々背後を振り返りながら、うろうろしたりしているからだ。

しか『誰かと待ち合わせしている』という訳ではなさそうだ。

店内には、彼女に座席位置を知らせようとする者は見られない。

客達はそれぞれに会話や作業に没頭しており、イヴを気に留める様子はないからだ。
という事は……。

広末さん、一人で来てて、普通に席が見つからなくて困つてたのかな。

ここチエーンつていつでも賑わってるから、座席難民になりやすいんだよなあ。

——そうだ！

だつたら、わたしが席を譲ればいいじゃん！

主人公、己のひらめきに『我ながらよいアイデイア』と、一人頷く。

実を言うと、主人公のいるエリアは比較的空いており、隣席も空いている。

だが隣席を案内すると、イヴは『休日に学校の先生と、隣の席で飲食する』という事になり、それはちょっとリラックスできないだろう。

それならまずは、主人公がこの位置を教える。

それからイヴの邪魔にならないよう『もう帰るところだつたから』と退店すればいい。

これならイヴは『呼ばれたので仕方なく、学校の先生の隣で過ごす』という事にもなら

ないだろう。

よし！ 声をかけるぞ！

おーい！ 広末さーん！

SE6 イヴの足音

【最初から最後まで流す】

（主人公）

「…………？」

しかし……。

あれ？ 広末さん、何か、雰囲気が暗い…………？

こちらへ近づいてきたイヴは、どこか浮かない様子だ。そこで主人公は、気づいてもらえるよう手を振るべく、軽く手をあげてみる。すると、振り始める前に……ついにイヴと目が合つた。

（主人公）

「なぜか気まずそうに。

明らかにこの前とトーンが違う、不安そうで、怯えた声。

それでも、感情表現は薄め

……あ……

〈主人公〉

「こんにちは！ 偶然だね」

イヴ、主人公の姿を確認した途端、何だかホツとした表情になる。

「まだ含みのある雰囲気だが、少し持ち直して、笑う。
主人公の明るい声にホツとしている」

こんにちは。昨日ぶりだね

あれ？ 気のせいだつたかな？

さつきは『何だか足取りが重そう』って思つたけど。
こうしてみると、特に昨日と変わらないような。

でも、それにしては……。

主人公、イヴの態度を不自然に思い、思わず勘織る。しかし、話を聞かない事には、確認のしようもない。まずは、席の件について尋ねる。

〈主人公〉

「そうだね。二日連続で会うとは思わなかつた。

広末さんは、一人？ もしかして、席探してるの？」

「少し間をあけてから。

〔ゆっくりと歯切れ悪く、気まずそうに。なぜか、周囲を気にしながら〕

あ、うん。

〔少し間をあけてから。なぜか言いづらそうに〕

一人。

〔それでも、あくまで自然に聞こえるように、何でもなさそうに質問する。〕

実は、主人公が女性と一緒にいた事も、その人はすでに帰つたらしい事も知つてゐる。会計の列に並んでいる時に、偶然目に入つたからである。

うろうろしていたのには様々な理由があるが、その一つは『主人公に気づいてほしかつたから』。

しかし、卓上にカツプが二つ残っている事から、一応確認したい』
先生は、誰かと来てるの?』

あ、よかつた。思いのほか会話が弾みそうだ。

広末さんつて、パツと見ちよつと取つ付きにくうだけど、普通に愛想のいい子だよなあ
……。

主人公、難なく会話が続きたうなのと、イヴの表情が少し明るくなつた事に安堵する。

それから『事情はわからないけど、まずは座つてもらおう』と考える。

イヴが座る場所は、先ほどまで妹が座つていた主人公の向かいの席でもいいし、まだ空席の隣席でもよい。

そう思いながら、席に着くよう促す。

（主人公）

「そうそう。妹とね。

でも、アルバイトの時間が早まつて、もう行つちやつたんだ」

「あからさまにホツとして。

『仮に同行者がまだいるのなら、頼りにくい』と思つていた】

あ、今は一人なんだ】

〈主人公〉

「そう。広末さん。よかつたらここ座る?」

【無感情気味に聞こえるが、内心非常に驚いて】

えつ。

【あからさまにホツとして】

『ここ』とは、主人公の隣席を指して言つてゐるのだと思つている】
いいの? ここ、座つて】

〈主人公〉

「うん。どうぞどうぞ。わたしはもう帰る所だから」

主人公、イヴが思つた以上に嬉しそうなので、安心する。

それから『だからわたしは邪魔しないよ。ゆっくりカフ エタイムを楽しんでおくれ……』と、席を立とうとしたが……。

その途端、イヴの表情が、また一気に曇る。

「『それは困る』という感じで。

ショックを受けて、かえつて無感情になる

えつ。

【心細そうに。恐る恐る尋ねる】

帰つちやうの？』

〈主人公〉

「へ？ いや、居てほしいなら全然居るけど……」

え！ もしかして、わざわざ休みの日にわたしと話したいって思ってくれるの！

そ、そつかあ。今までほとんど接点なかつたのに、嬉しいな。でへへ。

……いやでも、わたし好かれるような事全然してないしな。
——何かがおかしいかも、これ。

主人公、一瞬イヴの言葉が嬉しくて、デヘデヘするが、すぐに、そんな樂觀視できるような状況ではなきそうだと気づく。

イヴは先ほどからずっと不安そうにしており、知り合いである主人公を見つけた途端、ホッとした表情を見せた。

それは、つまり……。

「心細そうに、食い気味に】

居てほしい……。

【少し間をあけてから。歯切れ悪く。

『やつぱり良くなきかもしね。これ以上一緒に居たら、先生にも迷惑をかけるかもしねない』と、思い直そうとする。

だが、それでも不安。そのため、らしくない、あいまいな表現を使い出す
あ。いや、やつぱりやめた方がいいかも】

〈主人公〉

「……？」

主人公、状況がつかめないながらに、イヴが助けを求めているらしい事だけは理解する。

先ほどまでの主人公は『広末さんが邪魔に思うのであれば、自分はさっさと退散しよう』と思つていた。

だが、そうではないなら力になりたい。

それは『主人公がイヴの学校の先生だから』とか『昨日助けられた身だから』という訳ではなくて……。

先ほど花音が言つた通り『人と人として』そうするべきだと思つたからだ。

だから主人公は、少し顔を近づけ、ひそひそ声でイヴにたずねる。

困りごとの内容はわからなくても、それがイヴにとつて、言いづらいものなのは理解できたからだ。

〈主人公〉

「どうしたの？ 何かあつた？ 話、聞くよ」

「戸惑うが、気づいてもらえて嬉しい。

事態を打ち明けようとする。だが、声が出ない
あ……」

〈主人公〉

「うん。いいよ。ゆつくり話しな」

主人公、そのまま、片手をイヴの肘のあたりにポンと置いて、続きを促す。

それからすぐ『同性とは言え、ちょっとなれなれしかったかも……』と反省したが、これは、今回に関しては、悪い方に作用しなかつたようだ。

イヴの表情が和らぎ、一度は閉ざされた口が、再びゆつくりと開く。

【長めに間をあけてから。とても言いづらそうに】

あの……】

〈主人公〉

「うん」

「ふり絞るようだ。

らしくもなく、まどろっこしい話し方になる】

外の大きい信号渡つてちょっと行つた所にあるご飯屋さん、わかる?】

〈主人公〉

「うん。わかるよ。新しくできた、イタリアンのお店でしょ？」

「【不安そうに、ゆっくりと】

そう。新しくできたとこ。

そこ、うちの店の系列で……今日私、さつき。

【少し間をあけてから。

今『さつき』とあいまいな表現を使おうとしたが、状況を正確に伝えるためにも『きちんと時系列を伝えよう』と考え直す】

三時までヘルプで入つてたんだけど

〈主人公〉

「うん」

イヴ、そこまで話すと、一度うつむき、それから、店の奥へ、ちらりと目をやる。

主人公もそれに倣い、一瞬だけ、イヴが示す方向を見やる。

そこには何人の客がおり、そのほとんどが、何の変哲もない一般客に思えた。
だが……。

「長めに間をあけてから。ひとりわ言いにくそうに】

あそこの、席の人が。

【長めに間を開けてから。

※ひそひそ声※ で。

とても言いづらそうに、申し訳なさそうに】

なんか、店出た時からずっと付いてきてるっぽくて……】

〈主人公〉

「！」

主人公、息をのむ。

それから、まずは『それ』が、どの人なのかを確認しようとする。

〈主人公〉

「もしかして、あそこの？」

イヴ、小さく頷く。

どうやら、主人公の勘は当たっていたようだ。

「【※ひそひそ声※】 で。

とても言いづらそうに、申し訳なさそうに。

『主人公がさしたと思われる、全身黒のコーディネイトの人物が、ずっとついてきている』
と伝えたい】

うん。あの、全身黒コーデの人】

……なるほど。

では、次に確認すべきは、それがイヴの顔見知りなのか、そうではないかという事だ。
イヴとの関連度合いによつては、怪しさはさらに増す。

答えにくくい事かもしれないが、最低限の情報として押さえておく必要があつた。

〈主人公〉

「……知つてる人？」

イヴ、目立たないように小さく、でも、とても不快そうに首を振る。

「【迷惑そうに】

全然知らない人。

【少し間をあけてから】

気のせいかも知れないけど。

【ふり絞るように。打ち明けるのが怖い】

なんか、怖くて……

〈主人公〉

「……」

7秒ほど沈黙。

そうだつたんだ。だから広末さんは、こんなに不安そうにしてたんだ。
だつたら……。

主人公、まずはゆっくりと息を吸う。

それから、これから自分がどうするべきなのか、考えをまとめた。

一瞬だけ見た『その人』は、一見、そこまで不審そうには見えない。

極端に身なりが悪い訳でも、不潔な訳でもないし、露骨に怪しい雰囲気も醸していない。

全身単色の服装だつて『そういうファッショニズムの人』で済まされる範囲だ。

だが、仮に『その人』がいかに好感度の高い、爽やかで清潔そうな人物だつたとしても、主人公にとつては疑惑の人でしかない。

それは、イヴが怯えているからだ。

これまでろくに接した事のない主人公に頼るほど『その人』を恐れているからだ。

よし……。

「沈黙が不安になり『あの、やつぱり何でもない。気のせいだと思う』と言おうとする。
しかし、途中で主人公の『わかった』かぶさる】
あの、やつぱり」

〈主人公〉

「わかった」

「〔怯えた声できよとんとして〕

えつ？」

SE7 主人が自分の鞄を手に持つ音
【最初から最後まで流す】

主人公、鞄を肩にかけ、飲みかけのコーヒーを手に取ると、そのまま立ち上がる。
それからイヴにこう告げた。

〈主人公〉

「行こう。ついてきて」

「主人公が何をしようとしているのかわからず、不安」

……先生？」

しかしイヴは、主人公がどこへ行こうとしているのかわからず、不安そうにしている。
もしかすると『主人公がこれから、疑惑の人に声をかけるのではないか』と考えている
のかもしれない。

主人公、これを否定するためにも、端的に次の行動を伝える。

〈主人公〉

「とりあえずこの店から出よう。大丈夫。一緒に居るから」

「従う意思はあるが、まだ混乱している
で、『出よう』って。」

【主人公が歩き始めたので、慌てて従う
あつ……】

SE8 主人公とイヴの足音1

【最初から最後まで流す】

SE9 店の自動扉が開く音

【最初から最後まで流す】

▲2 ここでSE1がフェードアウトし、SE10に切り替わる

SE10 外の環境音

【最初から最後まで流す】

【▲3でフェードアウトする】

SE11　主人公とイヴの足音2

【最初から最後まで流す】
【止まり次第SE12】

主人公、そのままイヴを伴つて、店を出る。

『那人』がここからどう出るかはわからず、恐ろしくはあつた。
だが、振り向いてはいけないと思った。

幸いにも、今は昼だ。人通りの多い所だけを通れば、向こうも手は出せまい。
比較的安全性は保たれるだろう。

こうして店を出た途端、主人公はすぐさま、スツ、と手をあげる。
すると、さすが街中だ。

即座に一台のタクシーが気づき、こちらへ向かってくる。

SE12　タクシーが近づき、停車する音

【最初から最後まで流す】

〈主人公〉

「これ乗つて、マンションまで帰ろう。

大丈夫。さつきの人、ついてきてないみたいだから」

SE13 タクシーの後部座席の扉が開く音

【最初から最後まで流す】

〈タクシーの運転手〉

「上品で、仕事のできそうな雰囲気の老婆。

穏やかだが、はつきりとした口調で

「こんにちは。どちらまで？」

主人公、イヴと共に後部座席へ乗り込むと、すぐに運転手へ目的地を伝える。

〈主人公〉

「○○区××、△丁目、□番地の『ガーデン逢瀬』までお願ひします」

〈タクシーの運転手〉

「ガーデン逢瀬周辺の地形がわかるので、すぐに合点がいく」

ああ、ガーデン逢瀬（おうせ）ね。はい。承知しました。では、出発しますよ

〈主人公〉

「よろしくお願ひしまーす……！」

【主人公が運転手に頭を下げたので、自分もならう】

あ。よ。よろしくお願ひします……！」

SE14 タクシーの後部座席の扉が閉じる音

【最初から最後まで流す】

SE15 タクシーの発進音

【最初から途中まで流す】

【発進後、後、SE16になだらかに切り替える】

SE16 車の環境音

【最初から最後まで流す】

【繰り返して流す】

【ごく小さな音で流す】

そのまま、7秒ほど沈黙。

こうして、タクシーは発進する。

主人公、乗れたはいいものの、ここから渋滞に巻き込まれやしないかと心配になるが、それは杞憂だつたようだ。

タクシーは軽快に大通りを進み、あつという間に最初の信号を通過する。

なので主人公は一度背後を見やり、信号が赤に変わり、さらに、特にこちらを追つてくる車なども見られない事を確認してから……大きく息をついた。

（主人公）

「……ふう。これでもう安心だね」

「息づかいだけで表現する。困ったように」

……

だが、イヴはそうは思っていないようだ。

先ほどよりもさらに申し訳なさそうに身体を縮こませ、こちらを見上げてくる。

しかし、すでに彼女を脅かすものはない。

つまり、彼女が気になつてるのは、もつと別の事なのだろう。

「【申し訳なさそうに、おずおずと】

あの、先生

「主人公」

「うん？」

「【※マークまで、申し訳なさそうに。タクシー代を心配している。

『ガーデン逢瀬』までは、先ほどのカフェの最寄駅から、地下鉄で何駅もある。

それは、イヴからすれば、とてもタクシーで移動しようと思う距離ではないからである】
いいの？ タクシーなんて乗っちゃって。

【『嬉しい』以上に『申し訳ない』が先に立つ】

※『迷惑そう』に聞こえないようにお願いします

その。助けてくれたのは、嬉しい。

でも、ここからマンションまで、結構あるのに。

【少し間をあけてから。振り絞るように】

「めんなさい。私が変な事言つたから……」

※

〈主人公〉

「変な事じやないよ」

「か細い声で
え？」

主人公、即座に、はつきりと否定する。

イヴの言わんとする事はわかる。

だからと言って、こうしない選択肢はなかつたからだ。

もし徒歩で移動していたら、どうなつていたかわからないし……。

そもそも自分は、少しでも早くイヴの不安を解消するために、タクシーを選んだのだ。

そのためには、多少交通費がかさむ事など、些事である。

〈主人公〉

「広末さんが怖がつてゐるのに、あそこに居続ける訳ないでしょ。

いいんだよ。おかしな人が居るって教えてくれて、ありがとうね」

「気持ちはとても嬉しいが、やはり申し訳ない】

そう言つてくれるのは、すごく嬉しい。

【『やはり、お金まで出してもらうのは……』と考える】
でも……。

【少し間をあけてから。妥協案を思いつく。

『せめて支払いをすれば罪悪感が減る』と考え、お財布を出そうとする】
じゃあ、せめてタクシー代払わせて】

〈主人公〉

「いいからいいから。どのみち、帰る所一緒なんだし。

さつきも言つたけど、わたしはもう帰る所だつたし】

【「困る。主人公に受け取る気がまるでなさそうなので】
でも……】

しかし、イヴは譲らない。

確かにそうだろう。

もし立場が逆だったら、主人公も同じ反応をするだろうし。
だが、これがお互い同意の上での選択ならまだしも、今回は主人公の独断で行つた事だ。
『じゃあ支払いは割り勘で……』などとは、まず言うはずもない。

なのでここは視点を変えて、イヴが困惑している、他の可能性を確認しようと思つた。

〈主人公〉

「……あ、もしかして広末さん、この後行くところあつた？
それなら目的地、そつちに変えるよ」

「慌てて否定する。主人公に誤解されはいけないので。

実際に、先ほどの店でカフエラテを飲んだ後は、帰るつもりだつた
あ。違うの。私も、もう帰るだけだつたから。

寄ることかは、ない。大丈夫」

〈主人公〉

「じゃあ、帰ろう。たまにはタクシーもいいでしょ？」

「とても申し訳なさそうに。

『だつたらやつぱりタクシー代を払いたい』と言いたい
でも……だつたらやつぱりお金。

私、先生にすごい迷惑かけちゃつたし……』

……むむむ。食い下がるなあ。

広末さん、ちやんとしてそうだもんなあ。そりやそりや。
何て言つたら、納得してもらえるかなあ……。
あ、そうだ。

主人公、ここでひらめく。

気持ちがわかるからこそ、イヴへの対応には苦心した。
だが、よく考えたら、先日似たような事があつたではないか。

〈主人公〉

「いいんだつて。助けさせてよ。

『困つた時は助け合い』でしょ?』

「『困った時は助け合い』という言葉に覚えがあるので
あ……」

主人公、先日のイヴの言葉を復唱して微笑む。
すると、イヴの口がぽかんと開き、それから、ホッとした表情になる。

「少し間をあけてから。

【噛みしめるように。主人公の気遣いがとても嬉しい】
そつか。

【少し間をあけてから】

『困った時は助け合い』か……。

【噛みしめるように繰り返す。

表には出ないが、正直、少し泣きそうになつている】

そつか……】

（主人公）

「そうです」

主人公、にこつと笑つて大きく頷く。

車内には、ようやく穏やかな雰囲気が満ち、心なしか、外の景色も明るくなつたような気がする。

「やつと笑顔になり、声が明るくなる。

それから、先日の主人公と同じリアクションをする】

じやあ、お言葉に甘えます。

【真剣にお礼を言う】

先生、ありがとうございます……』

〈主人公〉

「どういたしまして』

主人公とイヴ、微笑み合う。

しかしここで、主人公はまた新たな問題に気づく。

自分達は無事大切なコーヒーを握りしめたままの逃走に成功したが、時刻は十六時近く。小腹がすく頃である。

そもそも十五時までアルバイトだったというイヴは、昼食をとつたのだろうか？

業務開始時刻によつては、休憩があつたかどうかも謎だ。

もしかすると普通にお弁当持参だつたり、飲食店だからまかない的なものが出たりしているのかもしぬないが、飲食店でアルバイトした事のない主人公には、その辺がよくわからぬ。

確かめておこう。

〈主人公〉

「ていうか、広末さん、バイト上がりだつたんだよね。

お昼ご飯つて食べた？」

イヴ、主人公の質問に、きよとんとしつつも答える。

「【急に話題が変わつたので驚くが、言われてみれば、確かにお腹が空いている】えつ。お昼？ まだ食べてない。

お店忙しかつたし、さつきは、食べ物注文する気になれなかつたし……」

ふむ。じゃあ、我慢してゐるだけで、結構お腹がすいているんじやないかな。

広末さんは平氣そうにしているけれど、この子があまり顔に出ないタイプだつていうの

は、もう十分理解したし。

かといって『じゃあ、今から別のお店に食事に行こうか』とか『スーパーに寄ろうか』つて訳にはいかないよね。

早く家っていう安全な場所に帰るために、タクシー乗ったんだから。
……ん？ 別のお店？

そういえば……。

主人公、さらなる重要事項に気づく。

そういえばも何も『この後行くところあつた』のは、自分の方であつた。
一気にサーツと、全身から血の気が引いていく。

ああー！

柔軟剤買うの忘れた！

わたしという人間は、どうしてこう、抜けているのか！
やつば……。

主人公、内心呆然としつつ、イヴを不安がらせないために持ち直す。

柔軟剤はあきらめるしかないが、食事をあきらめる必要はない。
せめてイヴに、お腹を満たしてもらいたい。

〈主人公〉

「じゃあ、マンションの近くのコンビニでおろしてもらつて、何か買つて帰ろうか。
好きなもの食べようよ。奢る」

「驚きつつも、嬉しい。だんだん元気が戻っていく。

『いいの?』は『奢る』ではなく『コンビニに寄ろう』に対しての回答】
いいの?

〔少し間をあけてから〕

うん。寄りたい。

そうだよね、マンションの近くのコンビニなら、ルート同じだし。

〔慌てて補足する。〕

先ほどの『いいの?』は『奢つてもらつていいの?』と受け止められかねない事に気づいて

あ、でも、お昼はちゃんと自分で買うから。

〔しつかりと念を押す。このままでは、それでも奢つてくれそうなので〕

先生はタクシーだけ。タクシー代だけでお願ひします」

〈主人公〉

「気にしなくていいのに」

「【『とんでもない』という感じで】

氣にするよ。ほんとなら、私が先生に奢らなきやいけない位だし。

【おそるおそる質問する。

もし、自分のせいで主人公が食事しそびれたのなら、とても申し訳ない】

先生はお腹、空いてないの？

さつき、私のせいで出る事になつちやつたから……

〈主人公〉

「まあ確かに、おやつを食べたい気分ではある。

……あ！」

「【主人公が何かを思い出したようなので】

「うん？」

主人公、ポンと手を叩いて、鞄の中を探る。

おやつといえば、今日はお気に入りのお菓子を持ち歩いていたのを思い出したのである。

SE17 主人公が鞄の中をあさる音

【最初から最後まで流す】

【小さめの音量で流す】

〈主人公〉

「お菓子なら持つてたの思い出した」

「【きよとんとして。主人公が自分のお菓子を自分で食べるのだと思つていてる
え？ お菓子ならあるの？】

〈主人公〉

「はい。ささやかなものですが……」

「【お菓子を差し出されて。これだけ色々してもらって、さらに何かをもらうのは恐縮だが、

それ以上に、目の前のお菓子に関心がある。

それは、とても可愛らしい容姿をしていたからである】

あ……。いいの?』

〈主人公〉

「もちろん。チョコレート。食べたらちよつと元気出るよ。どうぞ」

SE18 主人公がイヴにお菓子の包みを差し出す音

【最初から最後まで流す】

「少し間をあけてから。ちよつと泣きそうになつて。

少し悩んだが『チョコレート一粒位なら、いただいてもいいだろう』と思う。

なので、心からお礼を言う】

ありがとう。いただきます】

〈主人公〉

「ふふふふふ」

SE19 イヴが包みを開く音

【最初から最後まで流す】

主人公、自分もチヨコを口に放り込みながら、イヴの表情がより明るくなつた事に嬉しくなる。

持つべきものは、ちょっとしたお菓子である。

【楽しそうに。チヨコレートがウサギの形をしたデザインで、可愛らしいので】

このチヨコ、うさちゃんの形してある。

【しかしそれは、一見、いかにも大人らしい主人公のイメージとは違うので、なんだか微笑ましくなってしまう。】

これを昨日の一件と照らし合わせ『そうか。先生って、こういう可愛い感じの人なんだ』と理解し、一気に親近感が沸く

ふふ。先生、こういう可愛いお菓子とか食べるんだね』

あ！ よかった！ 広末さんが笑つた！

主人公、イヴの顔がほころんだので、ますます嬉しくなる。

イヴは今、お菓子のデザインよりも、可愛らしいお菓子を好む主人公を『可愛い』と感じ、笑顔になつてゐる。

しかし主人公は『イヴは、お菓子のデザインが気に入つたので笑つたのだ』と勘違いしている。

主人公は鈍い。

そう！ このお菓子、見た目も味も最高なんだよ！

などと、違う方向に盛り上がつてゐる。

〈主人公〉

「それね、マジで美味しいから。

わたし、全チョコの中で、そのうさちゃんチョコが一番好き

「関心を持つ。

これを聞くまでは、普通の袋入りの、お手頃価格のチョコレートだらうと思つていた。しかし、主人公が熱く語るので、味もすごいのかと、より気になつてくる

へえ？

【チヨコレートを食べる】 ※食べているフリでOKです※

……！

【実感を込めて。嬉しそうに】

ほんとだ。美味しい』

「主人公」

「でしょ!?」

主人公、得意になり、思わず声が大きくなる。

すると、イヴがまるで子どもを見る母親のように笑った。

昨日に引き続き、またもどちらが年上なのかわからなくなつてしまつたが、まあ、結果オーライという事にしておこう。

【目を輝かせている主人公が可愛くて、笑顔になる】

ふふつ。

【少し間をあけてから。

『自分は今日、主人公のこのよくな人柄に救われたのだ』と実感が沸く】

先生、ありがとう』

イヴ、ゆっくりと、でも深々と頭を下げ、チョコレートの包みを、手の中できゅっと握りしめる。

〈主人公〉

「どういたしまして」

主人公に対するイヴの想いは、この日をきっかけに、大きく変化していく。

だが、主人公は気づかない。

『お気に入りのチョコレートが喜ばれて嬉しい』位に思っている。

〔泣きそうになりながら〕

「ありがとう……」

ここでフェードアウトして終了。